

豊かな人間性を培う家庭教育の推進

— 家族の絆を深める親子のコミュニケーションの在り方 —

研究指導主事 常盤陽子

Tokiwa Youko

要 旨

社会が多様化し便利になっていく反面、子どもも親も毎日忙しく、家庭の中でゆったりと過ごすゆとりすらなくなっている。親と子どものコミュニケーションも希薄になり、家庭の中で安心感が得られない子どもが増えてきている。このような状況を踏まえ、家庭の中でどのようにして家族の絆を深めていくか、具体例を通して考察し、学校と家庭の連携の在り方を探った。

キーワード： 家族の絆、親と子のコミュニケーション、自己肯定感、家庭学習

1 はじめに

家庭教育は子どもが初めて出会う教育であり、すべての教育の原点とも言える。ひと昔前は、子どもは大家族の中に育ち、いろいろな人とコミュニケーションが自然にとれる環境にあった。しかし、家族は核家族化し、機能が多様化する中で子どもも親も忙しくなり、なかなか家族がそろうことも少なくなっている。親と子がじっくり向き合っってコミュニケーションをとること自体難しい状況にあると言える。

この家庭教育の危機的状態に、国も平成18年12月、改正された教育基本法第10条に「家庭教育」の項目を新設し、父母その他の保護者は、子の教育について「第一義的な責任を有する」と定め、「生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」というように、保護者に対してその責任を明らかにしている。

そこで、本研究では、家庭教育を見直し家族の絆を深めるために、いかにして親子のコミュニケーションをもつことが必要か、小学校低学年までの子どものコミュニケーションの在り方について探るとともに、学校と家庭がどのように連携を深めていけるか考察した。

2 研究目的

親子の絆を深めるためのコミュニケーションづくりについて考察し、学校と家庭との連携の在り方を探る。

3 研究方法

- (1) 子どもの発達と親のかかわりについて考察し、良好な親子関係を探る。
- (2) 具体例を通して、親子の絆を深めるコミュニケーションについて考察する。

(3) 学校と家庭の連携の在り方を考察する。

4 研究内容

(1) 子どもの発達と親のかかわり

人間は哺乳類の中でもほかに類を見ないほど、不完全でひ弱な状態でこの世に生まれてくる存在である。生まれたその時から他者の保護を必要とする状態で生まれてくる。その「他者」というのは親であり、主に母親の世話のもとに成長していく。そのため、子どもにとって親は環境そのものであり、親とのかかわりが子どもの成長に大きな影響を及ぼすのである。

まず、その親とのかかわりがどのように子どもの成長や心の問題に影響していくのか、発達段階に沿って考えてみたい。

ア 乳児期

子育ては子どもを自立させるための営みとも言えるが、まず、この生まれて間もない乳児期は、これから育つための基礎となる土台作りの時期である。この時期に大事なことは、

- ① 親に対しての基本的信頼感を確立させること
- ② 親から大切にされているという安心感を得ること

であり、母親との二者関係を確立させることである。子どもは、母親から抱っこされて授乳されるが、それは単なる栄養摂取というだけでなく、抱っこされ、温かいまなざしとともに愛情を十分に注がれる。このことによって母親から直に伝わってくるぬくもりとお腹が一杯になる満足感を体験する。また、排泄することによる快感とその汚れをきれいにしてもらい気持ちよさも体験する。繰り返し空腹感、不快感、恐怖心などを取り除いてもらうことにより、母親に対して、大切にされているという安心感といつも気持ちよさを与えてくれる存在としての基本的な信頼感が確立されていくのである。この基本的な信頼感がしっかりと確立されるのが、その後に必要なしつけや学習に対する意欲へとつながっていくのである。

イ 幼児期

幼児期は、親が子どもの身の回りの自立に向けて「しつけ」を行う時期である。この時期に大切なことは、乳児期に必要な基本的な信頼感が確立され、「しつけ」を受け入れるだけの心理的な素地が整っていることを前提として、

- ① 言葉によるコミュニケーションを成立させること
- ② 遊びを通してコミュニケーション能力やルールを身に付けること

であり、家族との三者関係を確立させることである。この時期の子どもは、授乳に頼っていた段階から次第に自分で食べる段階になり、おむつに頼っていた段階から自分の意思でトイレで用を足す段階というように、他律から自律へ移行する。その移行期間に、自分の身の回りのことが自立できるように援助するのが「しつけ」である。それと同時に親から話しかけられ、模倣することで言葉も豊富になり、初めて言葉によるコミュニケーションがとれるようになる時期でもある。

また、自分以外の世界にも興味を示し始め、何でも自分でしてみたいというような意欲が旺盛になる時期でもある。この時期には、いろいろな失敗も経験するが、親の言うことを聞いてがんばったり、親からほめられたりする体験が、その失敗を乗り越えていく原動力になる。この「しつけ」を受け入れる心理的な素地は、乳幼児期の基本的な信頼感の土台がしっかりとできていて、初めて成り立つものであり、根底に「この人の言うことは聞いて大丈夫」

という信頼感がないと身に付かないものなのである。

しかし、この時期は、子どもは、まだ完全には自立していない状態にある。遊び場では親から少し離れて遊びながらも、不安になると母親のところへ戻り、「甘え」と「自立」の間を行ったり来たりしている。また、このころになると、遊びの場で父親が活躍し、家族（父親）との三者関係が確立する。

ウ 学童期（低学年）

小学校入学の頃になると、自分の身の回りのことはほぼ自立でき、骨格もしっかりして体力も付いてくるようになり、学習や運動に取り組む基本ができてくる。精神面も充実してくるが、低学年のうちはまだまだ甘えたい時期であるので、母親は、子どもの不安をしっかり受け止める必要がある。子どもはしっかりと自分を受け止めてもらうことにより、自信と勇気もらい、がんばる気持ちが育っていく。家の中に自分をありのまま受け止めてもらえる居場所があり、家族の中で自分らしくいられるという環境が学校での仲間関係を構築していく力となるのである。

このように、子どもは家庭の中で自分のありのままを受け止められ、表現し、家族から大事にされているという愛され感をもつことが明日へのやる気、エネルギーの源となるのである。

しかし、今日、学級の中を見渡してみると、落ち着きのない子ども、すぐに友達に暴力をふるう子ども、自分の身の回りのことができていない子ども、いつも眠そうにしている子どもなど不安感の強い子どもは確かに存在している。これは、子ども自身の問題というよりもむしろ、多くの場合、子どもを取り巻く環境（家庭・地域）の問題であり、今まで述べてきたような良好な親子関係を築くためのコミュニケーションの在り方を考察していくことが家族の絆を深めることになると考える。

(2) 具体例からみる親子の絆を深めるコミュニケーション方法

「第3回子育て生活基本調査」（ベネッセ教育研究開発センター、2007）によると、親子のコミュニケーションは、主に会話によるコミュニケーションと行動によるコミュニケーションがあり、低学年では会話より行動によるコミュニケーションが多く見られる傾向にある。そして、年を重ねていくにつれて、会話によるコミュニケーションが行動によるコミュニケーションを逆に上回っているという結果になっている。やはり、小学校低学年までの子どもにとって、親と一緒に何かをするということが、コミュニケーションを深めるポイントとなっているようである。

また、平成19年度家庭教育アンケート（教育研究所、2007）によると、奈良県の子どもがもつ父親像・母親像は「たよりになる」「やさしい」など、好意的な見方が多く、特に母親は父親より全項目において好意的に感じているという結果が出ている。会話の内容を見ると、「友だち」「勉強」「先生」のことなど、子どもの生活に密着している日常的なことは、圧倒的に母親が多いので相談しやすい存在であることが分かる。それに対して父親とは会話の量が少なく、父親は日常的に子どものことを理解しにくい状況にあると考えられる。

このことにより、親子のコミュニケーションを深めるために考えるべき視点としては、

- ① いかにして行動や会話のコミュニケーションを生み出していけるか
- ② 母親だけでなく、ふだん子どもとのコミュニケーションの少ない父親の出番をどのようにつくっていくか

ということである。子どもは、小さいうちは親と行動を一緒にすることに喜びを感じ、認められることを望んでいる。まして、ふだん話すことが少ない父親だからこそ、行動を共にすることによって新しい会話が生まれ、認められると喜びも倍増する。このようなことも考慮に入れながら、具体例を通して良好な親子のコミュニケーションの在り方を考察していきたい。

ア 「手伝い・あいさつキャンペーン」の実践から

平成20年度、教育研究所家庭・幼児教育部家庭教育係が実施する事業として、主に幼稚園児を対象に「手伝い・あいさつキャンペーン」を実施した。これは、家庭における子どもたちの役割意識や責任感をはぐくむことにつながる「お手伝い」や、人間関係をはぐくむ出発点となる「あいさつ」をする習慣の大切さを啓発する目的で行っている事業である。具体的には、授業参観などの機会を利用して親子で共に体験活動を行った。取組例としては以下のとおりである。

表1 取組例

- ・ あいさつできるかな
- ・ おそうじ上手にできるかな
- ・ クリーニング屋さん
- ・ おもてなし
- ・ おにぎり作り等



写真1 「手伝い・あいさつキャンペーン」

このように、親子で体験活動をしたが、事後のアンケート結果では、ほぼ8割以上の保護者に「よかった」という意見をいただいた。

表2 「手伝い・あいさつキャンペーン」のアンケートから

	人数(人)	割合(%)
よかった	206	85.2
どちらともいえない	31	12.8
意義を感じない	3	1.2
無回答	2	0.8
合計	242	100

表3 保護者の感想

- ・ 親の方でできないと決め付けず、時間がかかっても面倒に思わず、子どものことからお手伝いしてもらうことが大切。
- ・ 子どもは親が思う以上に大人のあいさつや家事の様子に興味をもって見ているのだな、と思った。
- ・ 大人が少し手を添えるだけで今までできないと思っていたアイロンがけができるんだ、と思った。

親は体験活動を子どもと共有することで、思った以上に子どもが意欲的であることや、いろいろなことができるということに気付けるよいきっかけとなったようである。親は、一番近くにいる子どものことを実はよく分かっておらず、親が「まだできないだろう」「危ない

からやらせない方がいい」「お手伝いをさせたら、かえって二度手間になる」というような勝手な思いこみや面倒に思う気持ちがある。この体験を通して子どものことを「意外とできるなあ」「がんばっているなあ」というように親の意識が変わるきっかけとなったことは、とても意義深いと考えられる。その後、「家庭においても子どもがお手伝いを自分から進んでやってくれるようになった」という感想も多く寄せられている。親の喜びの気持ちや子どもに対する感謝の気持ちを「ありがとう」という言葉に表現することが自然に多くなることで、子どもも親から認められた喜びを感じ、良好なコミュニケーションが築きやすくなるのである。

イ 小学校の具体的な実践例から

(7) 親子二人読み（平成20年度奈良県指定研究員授業実践より）

音読の宿題と言えば、子どもが読んで親が聞くというのがほとんどの形態である。この二人読みは、簡単な詩を親子で掛け合う形態であった。そのため、自然に練習が必要となる。最初は、宿題ということで仕方なくやっていた親子が、そのうち詩の面白さやリズムカルな詩の流れに知らず知らずのうちに引き込まれていったようだ。（興味を引く題材設定）

また、掛け合いの練習をする時には、「こんな読み方をしよう」、「うまくできたね」など親子で自然な会話が盛り上がる。とても音読のリズムがいいので、やっているうちに二人でする楽しさに引き込まれる。練習の中で「お母さんって結構うまいな」、「この子はこんなに読めるようになったんだ」というように、お互いに相手を認め合う気持ちも生じてくるようである。（体験の共有と認め合い）

練習が面白くなってきたところで、「音読発表会」を位置付けたので、さらに練習を継続していく意欲の動機付けとなったことは明らかである。（目標設定による継続していく動機付け）特に実践の中ですばらしかったのは、父親が積極的に参加してくれたことである。日ごろ子どもとの触れ合いの時間が少ない父親にとっては、貴重な時間になったと思われる。また、子どもも父親との共同作業は楽しいというだけでなく、日ごろ接点が少ないだけに自分だけを見つめてもらえる時間は大きな満足感が得られるのである。

(4) 家庭学習の在り方

今までの家庭学習は、学力の補充あるいは調べ学習が主な流れであり、親が主体的にかかわるということはあまりなかったように思う。学年が上がるごとに、隣りについてやっていた宿題も次第に親も興味を示さなくなる傾向にある。その中で、前述した「親子二人読み」の宿題は、**興味を引く題材設定**→**親子での体験の共有と認め合い**→**目標設定による継続していく動機付け**という流れをうまく作ることで、練習中の親子の会話も膨らみ、親も「やらされている」という感覚よりはむしろ楽しんでやっていたようである。

このように、時には「親子のコミュニケーション」を深めるための宿題であってもいいのではないだろうか。内容は、二人読みにかかわらず、いろいろ考えられると思うが、大切なことは、

- ① 親子で同じ経験を共有すること
- ② 子どもにとって、自分だけ見つめてもらえる時間をつくること
- ③ お互いのよさを認め合えるような場をつくること

である。同じ「時間」と「場」の共有によって、同じ位置に立ち、それによって見えてくるお互いの気持ちやよさを認め合うことが、親子にとって特別な時間となる。この充足し

た時間が子どもの意欲や自己肯定感を高めることになるのではないかと考える。

(3) 学校と家庭との連携の在り方

親子のコミュニケーションとは、本来、家庭の問題であり、そのことをあえて学校との連携に結び付けてしまうことに違和感を感じるころだが、最近の現状にみられる学校生活への影響を考えると、学校として見過ごせないところまできている。子どもとのコミュニケーションをどんなふうにとっていけばいいのかわからない親も増えている中、学校が担う役割も大きくなっている。学校と家庭を結ぶ家庭学習（宿題）の存在をもう一度考え直し、そこに、親子のコミュニケーションが自然に深められるような「しかけ」を仕組むことは、親子の良好な関係づくりのきっかけを提供することになるのではないかと考える。このきっかけをうまく提供していけば、自ずと親子の肯定的な会話が増えていき、一緒に行動できるような仕組みをつくっていきける。そのためにも、学校はどのような効果を狙って家庭学習を活用していくか、しっかりと考えた上で「しかけ」をつくっていかねばならない。

5 研究結果の考察とまとめ

本研究は、子どもの発達の土台である乳幼児期から小学校低学年までに良好な親子のコミュニケーションをいかにつくっていくか、その方法について探ってきた。家族の絆は、すなわち、家族一人一人のよさを認め、ありのままの自分を認めてもらえる居場所が家庭の中にあってはじめて深められるものである。家庭の中に居場所があれば、自己肯定感も高まり、何事にも自信をもって取り組める。この家庭の中での居場所をつくるために、親子がお互いによさを認め合い、コミュニケーションを高めていくことが大切である。

しかし、親の毎日は忙しいので、子どものがんばりに気付き、子どもを認めてあげることが十分にできずに、過ごしていることが多い。そこで、学校や地域がこのきっかけづくりをすることによって、親は自然な形で取り組んでいくことができる、ということが分かった。

学校は、良好な親子関係をつくることが子どもの意欲にもつながっていくことを、もっと意識すべきである。そして家庭学習の中に、いろいろな「しかけ」を仕組んでいくことによって、親子のコミュニケーションを高めていくことが大切である。そのことによって、家庭と学校のコミュニケーションも高められ、子どもの理解につながっていくのである。

参考文献

- (1) 小浜逸郎 (2008) 「「子育て」の本質」『そだちの科学 NO.10』日本評論社 pp.107-111.
- (2) 明橋大二 (2005) 『子育てハッピーアドバイス』1 万年堂出版
- (3) ベネッセ教育研究開発センター (2007) 『第3回子育て生活基本調査』 pp.34-37.
- (4) 桐山雅子 (2008) 「居場所としての家庭」『児童心理4月号』金子書房 pp.17-22.
- (5) 辰巳渚 (2009) 「子どもを伸ばす家庭のしつけ」『児童心理3月号』金子書房 pp.46-53.
- (6) 県立教育研究所 (2007) 『平成19年度家庭教育アンケート』 pp.13-14.